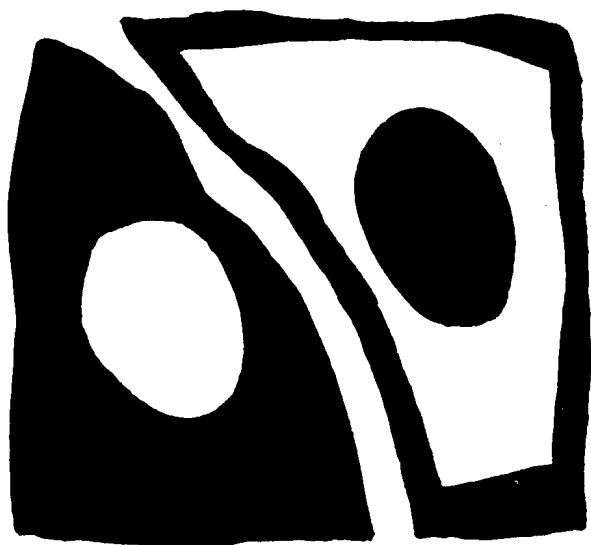


怒れど犬

高橋三千綱



怒れど犬

昭和五十三年二月二十四日 第一刷発行

昭和五十三年八月十七日 第三刷発行

著者 高橋三千綱

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一―二

電話東京〇三九五―二二二（大代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤澤製本株式会社

定価 八九〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます

© Michitsuna Takahashi 1978. Printed in Japan

●高橋三千綱

昭和二十三年生まれ。サン

フランシスコ州立大中退。

第十七回群像新人賞受賞。

著書『退屈しのぎ』

『彼の初恋』

『グッドラック』

目次

怒れど犬

5

十三歳の旅

57

たとえば風に向かって

129

装帧
大沢昌助

高橋三千綱作品集

怒れど
犬

怒れど犬

長い道程を歩いた。暗くて狭い道だった。

母は俯き、無言でいた。下駄の音が刻みの早い時計の振子のように神経質に響いた。疲れを感じ始めた足は、やがて地中から何ものかに引っぱり込まれるほど重くなった。それにつれて、母の握ってくる指の力が強まった。肌に触れてくる夜気に、異質の世界の匂いを嗅いだ。

一軒の家の前で母は足を止めた。呼びかけると、格子の硝子戸に灯りがともった。細く戸が横に引かれ、女が顔を出した。電球が弱っているせいか、荒れた髪の下にある女の顔は、土色に近かった。母を見て、女は視線を落した。握っている母の指は、一瞬ぎゅっと絞められ、徐々に弱くなった。

女の袖の下から男の子が顔を出した。尖った眼でこちらを睨んだ。眉毛の濃い子供だった。唇をきつく結び、刃物を潜ませているような攻撃的な眼差しを私の上に注ぎ続けた。私は顔を伏せた。他人に睨まれたのは初めての経験だった。

女はときれときれ、小聲で弁解をくり返していた。深い心労が女の顔を覆っていた。女は戸口から顔だけ現わし、胸から下は息子の陰に隠していた。

母の声は不安に満ちていた。母の言葉が少なくなるにつれて、女は饒舌になった。小ずるような表情が浮いた。女から視線を下に移すと、喰いついてくるような男の子の眼があった。私はまた俯き、土を靴の底で撫でた。

母はあきらめて頷いた。再び母は暗い道に私を引き戻し、歩幅を狭くにとってゆっくりと歩き出した。帰り道を行く私の足取りは軽かった。前方にすっかり馴染んだ遊びの領土が待っていたし、その先には家があった。

途中、母は二度立ち止まり、深い吐息を吐いた。先程の家にとって返そうとする母の氣持を察して、私は腕を引いた。二、三歳年上の男の子の眼差しには強い憎しみがあった。他者のどんな視線をも受け入れようとはしないかたくなさを秘めていた。それは獣の眼だった。

今度行くときはクロを連れていけばいいと思っていた。クロは三歳の私を背中に乗せて歩くほどの、頑丈な犬だった。遊んでいるそばに、見知らぬ子供たちが寄ってくると、私はいつでも、クロの傍に逃げ込んだ。クロは私の顔を舐め、知らない子供たちに向き直った。私は近所にいる子供たちと一緒に遊べない子供だった。仲良くされることより、いじめられることに怯えていた。近所の子供たちの眼差しを、正面からとらえて迎えることができなかった。自分を弱虫だと

思っていたし、また同じ言葉を父からも言われていた。強くなりたいとも願ってはいなかった。翌晩、母は尻込みする私の手を引いて、外に出た。私はクロの首輪に繋がれた鎖を握った。クロは首を下げ、前肢を低くして、地を這うように進んだ。犬の引く力が強くて、途中で何度かつまずいた。クロを連れて外に出るのは初めてだった。腕が抜けていくようだった。

女は前夜と同じ土色の顔で母を眺め、息子は激しい憎しみの眼付きで私を迎えた。クロは前に進み、玄関の格子戸に顔を近づけ、鼻息を吹きつけた。パジャマ姿の息子は女の足を押しのけて後ずさりをし、それきり姿を見せなくなった。クロはあたりを嗅ぎ回り続けた。女は犬の存在に神経を尖らせているようだった。白眼の部分が脈打つように凹凸を見せ、それでも母の方に顔を向けようとしていた。しばらくして女は引っ込み、やがて鼠色の鼻紙に包んだ紙幣らしいものを、何度か弁解をくり返しながら母に差し出した。

門を出るとき、一仕事終えたあとに出す母の安堵の溜息が聞こえた。クロは淡々としていた。垣根に鼻先を突っ込んだり、溝の匂いを嗅いだりしながら、暗い道を慣れた足取りで歩いた。今しがた行なわれた人間たちの掛け引きには少しの関心も寄せていなかった。家に戻ると、クロは当然のように犬小屋に入ってしまった。頭を撫でると、ざらついた舌で手の甲を舐めた。クロを撫でるとき、私はいつでも、ひょっとしたら噛みつかれるのではないかという危惧を抱いていた。クロが他の犬たちに見せる異常な闘争心を幾度か目撃していた私は、それが自分にも向けられる

のではないかと恐れていた。私の思い込みとは違って、クロはどんなときでも、幼児の私の護り役に終始し、家人のなぐさみ者に徹していた。

数日後に家を引き払った。

大きな家具はあらかじめ売払い、身の回りの家財道具だけを持って、両親は姉と私を連れて家を出た。クロは置き去りにされることになった。家族四人が荷物をかかえて家を出ると、クロは狂ったように飛び回った。締めつけられているような声で鳴き、眼は動転していた。角を曲ると、狼の遠吠を思わせる不吉な高い声が、空から響いて落ちてきた。駅が見えるところまで来ると、姉が歓声をあげた。続いて荒い吐息が湧き上がり、クロがぶつかってきた。私の胸や顔にとびかかり、両親の周囲を跳びはねた。鎖が砂利に当って賑やかな音をたてた。父は舌打ちをし、荷物を路上に置いてクロの鎖を掴んだ。

連れていこうと言って泣く姉には見向きもせずに、父はクロを荒っぽく引きたてた。クロは喘ぎ、前肢を宙に浮かされながらも、私たちのいる方に振り向こうとしていた。首が長く伸びていた。父は犬の腹を蹴った。友人たちを家に招いて、座の中心になっておどける父とは、別人のようだった。

父は興奮した様子で戻ってきた。両手を何度も叩きつけて埃をはいた。蒼白い顔になっていた。荷物を下げると、肩を怒らせて家族の前に立って歩き始めた。

笛が鳴って、電車は走り出した。私は開けられた車窓から肘を出して、流れ始めた静かな家並みを眺めていた。明るい日差しが、黒い屋根瓦に当たっていた。そのとき、ひきつった男の怒声があたりを引き裂いた。クロがホームを一直線に走ってきていた。背中が力強く波打っていた。私たちの姿がある車窓めがけてクロは跳躍し、車体に当って前肢を折った。クロの熱い吐息が掌に残った。電車は速度を増した。クロは体勢を立て直し、電車に負けないスピードで走った。後の方から、旗を持った駅員が追いかけてきた。

ホームが切れた。数メートル間近にまでクロは走ってきていた。次の瞬間クロの軀はホームを踏みはずして宙を舞い、地面にもんどり打った。クロは首を振って立ち上がり、線路脇をよろけて走った。置き去りにした家族に、それでも追いつこうとしていた。電車がカーブを切ると、クロの小さい姿は植込みの陰に隠れて消えた。父は、叫び声をあげる姉と私を叱りつけ、母をなじった。母は私の頭に手を置いて自分の胸に押さえつけた。私は頭を振って、窓の外に顔を突き出した。大平原にたった一人で放り出された気がしていた。

私たちは幾つ目かの駅で電車を降り、汽車に乗り換えた。何時間も汽車に揺られた。二度弁当を食べ、その間に眠った。終点の駅から大きなビルが幾つも見えた。そこから再び電車に乗り、一車輛だけの電車が道路の中央を走るくすんだ街に行った。今まで住んでいたところとは違った賑やかな、それでいて不思議に人の匂いのしないその街で、私は幼年と少年時代を過ごすことに

なった。

八畳間の隅にタンスがあった。あとは丸い卓袱台と裁縫箱だけだった。姉は小学校に通い出し、いつでも泣きべそをかいて帰ってきた。壁一つ挟んだ隣には、七八人の家族が住んでいた。十畳間に、大きな軀をした男や小さな女の子たちが、腐った油の匂いのある蒲団にくるまって眠っていた。女の子たちの服はいつでも垢じみている、黒かった。おいしいよと言って、笑いがら飯に醬油をかけて食っていた。私が真似ると、馬鹿なことするんじゃないと言って母は怒った。一軒の家を、二所帯に分けて住んだ。

門は朽ちかけていて、傾いていた。青い苔が塀の木目にそってびっしりと生えそろうていた。その塀に寄りかかって雲を眺めるのが、私は好きだった。

部屋には客が多く来た。以前住んでいた遠くの街にある家に来たことのある人もいた。大人はどこにでも行くことができるものだなと思って、私は少し羨しくなっていた。大人たちは、私と姉が眠っている傍で、大声で議論をとぼしては、熱にうかされたようになっていた。

家を中心にして、半径五十メートルほどが私の遊び範囲だった。そして、毎日、時間をかけて領土を広げていった。周囲にいる子供たちと、私の話す言葉の抑揚が異なっていた。私は注意深く彼等の言葉に耳を傾けた。しばらくたつと、私は異和感を覚えなくなった。私自身が新しい隣人たちと同じ方言を使うようになっていた。それはたやすいことだった。他者の持つ世界に順応

することに神経を使った。姉は長い間訛りが抜けず、口を開くたびに子供たちから笑われ、突きとばされていた。部屋に涙をためて戻ってくる姉は、母から言われた通り、教科書を広げて勉強をするのだった。

ある日、私は同年の小さな女の子と連れ立って、遠くの地域にまで出掛けた。みそっ歯をいつも出して笑う愛嬌のある女の子で、一軒置いた隣の家の一間を間借りしている五人家族の末娘だった。石ころの多い坂道をその女の子と一緒に下っていると、不意に一匹の犬が現われた。女の子は私の服を強く掴んで、こわい、と言った。黒っぽい、汚ない顔をした中型の犬は、うさくさげに私たちを睨みつけた。はなせよ、と言って私は女の子の手を振り払った。犬が吠えた。反射的に女の子は坂道を駆け上がった。犬が身構えた。急にこわくなって、私も駆け出した。すでに坂の上まで登りきっている女の子に向って、まってくれよと叫んだ。背後で犬が吠えた。私は石に蹴つまずいて倒れた。犬が襲いかかってくる気配がした。顔を上げると、女の子が白い眼をしてこっちを見ていた。助けてくれと私は言った。荒々しい唸り声がした。犬は私の尻に噛みついた。私は悲鳴を上げた。地面を掻きむしって立ち上がった。必死で逃げた。犬は坂の上まで追いかけてきて、そこで再び吠えた。

人気がない、舗装した道路をしゃにむに走った。走りながら訳の分らない言葉を吐き続けた。前方には、すでに女の子の姿はなかった。助けてくれ、と言った自分の言葉が頭の中にはね返っ

てきていた。

犬に噛まれた、私は泣きながら母にそう言った。母は裁縫をしていた。ズボンを脱がせ、尻を調べた。嘘じゃないわね、と訊いた。本当だ、狂犬だと私は言った。母は医者に私を連れていった。傷口とおぼしきあたりを消毒しながら、うん、犬の歯型が残っているなあと医者は言った。やっぱり犬でしたか、と母は訊いた。はあ、犬ですなあと医者は答えてラジオの音量を大きくし、数分の間株式の放送に耳を傾けていた。治療が終ると、はいでき上がり、と言って私の尻を叩いた。

襲われた現場に母を連れていった。一軒の家の庭先で、少年の腕に抱かれている犬を見つけた。あいつだと私は言った。母は庭に入っていく、家人を呼んだ。険しい表情で相手に詰問した。相手は首を傾げた。これはおとなしい犬なのだと言った。

犬は飼主の腕の中で、のほほんとして眼を細めていた。少年の指の動きを鼻梁に受けて心地よさそうにあくびをした。犬は、つい今しがた襲った相手が私であることを知っていた。

小さな犬ねえ、と言って母は私と犬とを交互に見比べた。私は黙っていた。犬が、パイプをくわえて私を眺めているような気がしていた。母は追及をあきらめた。少年はすっとぼけた顔をしていた。犬も飼主を真似て、人なつこそうに鼻を鳴らした。ずるい犬だと私は思っていた。

数年後に、私の一家は間借りしていた部屋からほど遠くないところに一軒家を借りた。父の所